

## タウト・トートロジー No. 263 & No. 290

全 10 作品 / アクリル / 塗装シート / 1.80x3.60m / 2018

モダニズム建築家であるブルーノ・タウトは、1934年から1936年まで高崎の少林山達磨寺境内にある草庵に暮らした。よく知られる『日本の家屋と生活』はこの庵で執筆された。

タウトは岡倉天心の演出をたいへん好んだ。天心は、彼が称するところの禅の個人主義と徳川幕府の形式主義とを、弁証法的に対立させてみせたのだ。

この対立は日本建築にもとりいれられ、キッチュな建築と対比された、簡素で禅的な伝統建築の表象が作りだされた。ついていないことに、キッチュな建築の代表とされてしまったのは、日光東照宮だった。

このペインティング・シリーズでは、前出著作中のキャプションを引用している。図版290のキャプションでは、近代に続く日光東照宮批判をみることができる。図版263のキャプションでは、創出者知らずの近代の発明が伝えられる。石の形をとって神秘の具現化がおこるといふ、誰も反論することができないファンタズムは、やがて世界中に知られるところとなった。

絵はがきじみた紋切型表象、タウトのある種のトートロジー。このシリーズは、その表と裏を描いた10点のペインティングにより構成されている。